

# 中学校吹奏楽部員の部活動「満足感」「有用感」に影響する要因<sup>†</sup> 一部活動に所属する中学生への質問紙調査の結果から<sup>1</sup>

佐川 馨・羽澤 知子\*  
秋田大学教育文化学部

本研究の目的は、中学生の部活動についてのイメージや見方、考え方を測定し、吹奏楽部と他の部活動の生徒との比較によって部活動「満足感」「有用感」に影響する要因を探り、学校吹奏楽の指導改善のための示唆を得ることである。A県内中央部4中学校の吹奏楽部、運動部、文化部に所属する1, 2年生488名(1年男子126名, 同女子118名, 2年男子138名, 同女子106名)に質問紙調査を実施した結果、「部活動のイメージ測定尺度」では「満足感」「活動性」「負担感」の3因子が、部活動の有用感測定尺度では「有用感」「充実感」「向上心」「集中力」の4因子がそれぞれ見出された。下位尺度の考察から、①中学生の部活動「満足感」に関連する要因は共通であり、「活動性」の高まりが「満足感」に影響を与えること、②中学生の部活動「有用感」は、「充実感」「向上心」「集中力」のバランスのとれた指導によって高まること、③吹奏楽部所属の生徒は「有用感」「充実感」「向上心」「集中力」のいずれについても総じて高く感じていること、④吹奏楽部所属の生徒の「有用感」は「充実感」が大きく影響していること、などが明らかとなった。

キーワード：吹奏楽、中学生、部活動、因子分析、重回帰分析

## 1 問題と目的

学校教育において部活動は、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間といった教育課程に含まれるものではなく、スポーツや文化などの共通の興味や関心をもつ生徒たちが、放課後や休日を利用して自主的に取り組む課外活動である。

部活動の有用性についてはいまさら強調するまでもなく、これまでも「心身の調和のとれた発達」「個性の伸長」「集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度」「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力」<sup>2</sup>を養うなど、特別活動によって培われる資質・能力を補う働きとともに、教科の学習だけではなし得ない様々な成果をもたらしてきた。

しかしこれまでは、教育活動の実態やその有用性

とは裏腹に、設置についての法令的な根拠はなく、今次の学習指導要領の改訂により、初めて部活動についての記述がなされた。総則の「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」では次のように記述されている。

生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること<sup>3</sup>。

部活動が学習意欲の向上につながり、責任感や連帯感などの涵養にも有用であることを国の立場として明確にした上で、教育課程との有機的な関連による学校全体としての取り組みの推進と、地域との連

2009年2月12日受理

<sup>†</sup>Factors Affecting Junior High School Brass Band Club Students' Feelings of Satisfaction and Effectiveness in Extra-Curricular Activities

\*Kaoru SAGAWA and Tomoko HAZAWA Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

携による運営の工夫を求めている。

学校教育における部活動の有用性については、研究者の立場からも様々な報告がなされてきた。たとえば角谷(2005)<sup>4</sup>は、中学生を対象にした質問紙調査の分析結果から、部活動への積極的な参加は学校生活の満足感の高さや学業コンピテンスの高まりにつながることを明らかにしている。また青木(2005)<sup>5</sup>は、高校運動部員の社会的スキルが無所属や文化部部員よりも高く、運動部活動が有能感と学校生活適応感に影響を及ぼすことで社会的スキルを育成することを報告している。吉村(1997)<sup>6</sup>は、部活動における自己表現・主張できる力の育成が、学校生活全体への適応に反映されると述べている。

しかし、部活動の学校教育における有用性を認める声の一方で、勝利至上主義による過重な練習もたらす生徒の学習や心身への影響、また顧問を務める教員の時間外の勤務など、様々な問題についても久しく指摘されてきた。これらの解決のためには、これまでのような運動部を主な対象とした研究や、部活動を総体的に捉えた研究に加えて、各部活動の個別の事情を踏まえた研究や文化部を対象とした研究の充実が望まれよう。

さて、吹奏楽部は一般的に他の部活動に比べ部員数が多く、学校教育における文化部活動の中でも最も活発な活動をしているものといわれている。このことは、2007年10月1日現在における全日本吹奏楽連盟加盟校が、小学校1079校(全小学校の4.75%)、中学校7058校(64.42%)、高等学校では3781校(71.17%)にも上ることからも推察されよう<sup>7</sup>。

吹奏楽部についても、学校教育における有用性の高さを認める声の一方で、前述のような部活動に共通の問題は見られる。それらの問題解決のための先行研究としては吉富・岩崎(1995)<sup>8</sup>が、指導者のリーダーシップの指導型とクラブの雰囲気、部員のモラルの関連について、「統制」と「親和」の増加が部員の活動意欲やモラルの高まりにつながることを明らかにしたものが挙げられる。また、吉富・谷原(1998)<sup>9</sup>は、吹奏楽顧問および部員を対象とした質問紙調査の結果から、吹奏楽活動の有用感と演奏レベル、指導のスタイルとの関連性について論じている。安達(1976)<sup>10</sup>は、小学校から高等学校までの吹奏楽指導者に対する質問紙調査の結果から浮かび上がった問題点を踏まえ、教員養成段階における指導の充実の必要性を求めている。

しかし、学校吹奏楽に関わる先行研究では、その多くが楽器の奏法などの演奏指導や音楽的な内容にかかわるものであり、前述のような論考は少なく、十分とは言えない状況にある。学校吹奏楽が学校教育の一部として、また生徒の学校生活の一つとして包含される活動である以上、様々な視座からの研究が求められるであろう。

そこで本研究では、部活動に所属する中学生を対象とした質問紙調査により、部活動についてのイメージや見方、考え方を測定し、吹奏楽部と運動部、他の文化部所属の生徒と探索的に比較することを通して、学校吹奏楽の指導改善のための示唆を得ることを目的とする。

## 2 方法

### 2.1 調査対象

調査対象者はA県内中央部4中学校の吹奏楽部、運動部、文化部に所属する1、2年生488名(1年男子126名、2年男子138名、1年女子118名、2年女子106名)であった。そのうち吹奏楽部は85名(1年男子7名、2年男子4名、1年女子34名、2年女子40名)、運動部は374名(1年男子119名、1年女子71名、2年男子134名、2年女子50名)、文化部は29名(1年男子0名、1年女子13名、2年男子0名、2年女子16名)である。

表1 調査対象者の内訳

学校	部活動	第1学年		第2学年		計
		男	女	男	女	
A	吹奏楽部	4	16	4	12	36
	運動部	37	16	38	19	110
	文化部	0	7	0	5	12
	計	41	39	42	36	158
B	吹奏楽部	1	9	0	18	28
	運動部	63	44	74	19	200
	文化部	0	6	0	11	17
	計	64	59	74	48	245
C	吹奏楽部	2	9	0	3	14
	運動部	16	11	16	10	53
	文化部	0	0	0	0	0
	計	18	20	16	13	67
D	吹奏楽部	0	0	0	7	7
	運動部	3	0	6	2	11
	文化部	0	0	0	0	0
	計	3	0	6	9	18
計		126	118	138	106	488

調査校の選定にあたっては、1学年の学級数が4以上の学校と3以下の学校の2群に分け、それらの中から吹奏楽部の規模やコンクール実績等が平均的と判断される学校を2校ずつ抽出し、協力を依頼した。調査対象者の学校別の内訳は、表1のとおりである。

## 2.2 調査用紙の作成

本研究で用いた質問紙は、基本的属性、SD法による部活動のイメージ測定尺度、部活動の有用感測定尺度から構成されている。

**基本的属性**：所属する部活動名、学年、性別。

①**SD法による部活動のイメージ測定尺度**：SD法による部活動のイメージ測定尺度の作成にあたっては、2008年9月22日～23日にかけて、大学の吹奏楽団に所属する42名（男15名、女27名）を対象に、中学校の部活動経験に関するイメージを自由記述させた。なお、このうち中学生時の所属部活動の内訳は、吹奏楽部34名、運動部6名、無所属2名であった。自由記述の内容を、KJ法を用いて整理し、18の形容詞対にまとめ、各項目について7段階の評価により回答するものとした。

②**部活動の有用感測定尺度**：部活動の有用感測定尺度の作成にあたっては、吉富・谷原（1998）の「学校吹奏楽の有用感」測定尺度、「吹奏楽コンクールに対する意識」測定尺度を参考にするとともに、2008年9月22日～23日にかけて大学の吹奏楽サークルに所属する42名（男15名、女27名）を対象に、「中学校の部活動」という言葉から連想されることについて自由記述させたものをKJ法を用いて整理し、55項目を作成した。各項目については、5段階の評価により回答するものとした。

## 2.3 予備調査

本調査に先だって質問紙の内容的妥当性を検討するため、2008年10月13日に大学の吹奏楽団に所属する3名（女3名）と音楽教育を専攻する7名（男1名、女6名）の計10名に予備調査を実施した。それぞれの項目についての評価と自由記述を併用し、不適当と思われる項目は修正、削除した。

次に、10月の第3週から4週にかけて、調査協力校の管理職、吹奏楽部顧問、運動部顧問らに質問紙の検討を依頼した。その結果、顧問の評価や友人関係等についての記述、また中学生に対しての教育的配慮を要すると思われる記述は、その後の部活動運営に思わしくない影響を与える可能性があると思

され、それらの項目を削除した。

最終的な質問項目は、SD法による部活動のイメージ測定尺度が18項目（7段階評定）、部活動の有用感測定尺度が31項目（5段階評定）であった。

## 2.4 本調査の実施

調査は2008年11月第2週から第3週にかけて、調査協力校の部活動顧問による集合調査法で実施された。調査の実施にあたっては、詳細な実施マニュアルを作成し、個人が特定されないこと、教員は回答を見ないこと、学習成績に影響は及ぼさないことを述べるなど、実施マニュアルにそって進めてもらえるよう特別の配慮をお願いした。

## 3 結果

### 3.1 SD法による部活動のイメージ測定尺度の分析

#### 3.1.1 因子分析結果

SD法18項目の質問について、全対象488名の回答を確認した結果、誤回答、欠損値は見られなかったため、全488名分を有効回答とした。結果の分析にあたっては、左側に提示された形容詞を基準に+7～1の得点を与え平均値と標準偏差を求めた。

3項目（質問3, 8, 14）に天井効果が見られたが、数値の偏りが大きくないこと、また、中学生の部活動に対する共通のイメージであり、その後の考察に有効と判断し、分析に含めることとした。

主因子法・プロマックス（Promax）回転による因子分析の結果、固有値の変化は、8.47, 2.53, 1.14, 0.87, 0.63…となっており、スクリープロットからも判断して3因子構造が妥当であると考えられた。

そこで再度3因子を仮定して主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。因子の抽出にあたっては、回転後の因子負荷量が0.40以上で、かつ複数の因子にまたがって0.40以上の負荷を示さないことを基準とした。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示す。なお、回転前の3因子で18項目の全分散を説明する割合は67.51%であった。

第1因子は、「楽しい～つまらない」「いごちのよい～いごちの悪い」「のびのびできる～きゅうくつな」「満足な～不満足な」「明るい～暗い」「にぎやかな～沈んだ」「親しい～よそよそしい」「親切的な～不親切的な」「あたたかい～つめたい」「なごやかな～ぎすぎすした」「安らぐ～落ちつかない」など、部活動の満足感や居心地、部員や顧問との関係など

表2 「部活動のイメージ」の因子分析結果

	I	II	III
楽しい - つまらない	.90	-.10	-.07
いごちのよい - いごちの悪い	.80	-.05	-.05
のびのびできる - きゅうくつな	.78	-.04	.10
満足な - 不満な	.73	.16	-.13
明るい - 暗い	.71	.05	-.12
にぎやかな - 沈んだ	.70	-.17	-.05
親しい - よそよそしい	.70	.01	.01
親切的な - 不親切的な	.64	.18	.08
あたたかい - つめたい	.56	.30	.05
なごやかな - ぎすぎすした	.53	.12	.24
安らぐ - 落ちつかない	.44	.14	.37
きびきびした - だらけた	-.16	.93	.00
まじめな - ふまじめな	-.05	.91	-.01
まとまりのある - まとまりのない	.04	.80	.04
やる気のある - やる気のない	.20	.69	-.13
ゆるやか - 厳しい	-.16	.09	.87
楽な - きつい	-.06	-.14	.84
のんびりした - せかせかした	.21	-.06	.58
因子間相関	I	II	III
I	-	.67	.47
II		-	.10
III			-

を総合的に評価する因子であると解釈して「満足感」と命名した。

第2因子は、「きびきびした-だらけた」「まじめな-ふまじめな」「まとまりのある-まとまりのない」「やる気のある-やる気のない」など、部員の取り組み姿勢や活動状況などに対する評価と解釈して「活動性」と命名した。

第3因子は、「ゆるやか-厳しい」「楽な-きつい」「のんびりした-せかせかした」など、部活動の規則や顧問の指導スタイル、練習量などに起因する活動の負担などをイメージしたものと解釈し、「負担

感」と命名した。

### 3.1.2 下位尺度間の関連

因子分析の結果を踏まえ、各因子にもっとも高い負荷量を示した項目を下位尺度とすると、「満足感」の下位尺度は11項目、「活動性」の下位尺度は4項目、「負担感」の下位尺度は3項目で構成される。内的整合性を検討するために各下位尺度の信頼性を求めたところ、Cronbachの $\alpha$ 係数は第1因子が $\alpha = .93$ 、第2因子が $\alpha = .90$ 、第3因子が $\alpha = .80$ であった。いずれの因子においても十分な値が示されており、内的な整合性があると判断された(表3)。

表3 部活動のイメージの下位尺度間相関と平均値, SD,  $\alpha$ 係数

	満足感	活動性	負担感	平均	SD	$\alpha$
満足感	-	.63**	.39**	5.37	1.00	0.93
活動性		-	.01	4.90	1.23	0.90
負担感			-	4.40	1.23	0.80

\*\* $p < .01$

次に各因子に高い負荷量を示した項目の合計得点を各下位尺度得点とした。表3に示すとおり、「満足感」得点(平均5.37, SD 1.00)、「活動性」得点(平均4.90, SD 1.23)、「負担感」得点(平均4.40, SD 1.23)という結果が得られた。

「満足感」と「活動性」( $r = .63, p < .01$ )、「満足感」と「負担感」( $r = .39, p < .01$ )は互いに有意な正の相関を示したが、「活動性」と「負担感」はほぼ無相関であった。

### 3.1.3 吹奏楽部, 運動部, 文化部の差の検討

吹奏楽部, 運動部, 文化部の差を検討するために、部活動と学年を独立変数、中学生の部活動に対するイメージの三つの下位尺度を従属変数とした2要因の分散分析により比較した(表4)。

分散分析の結果、「満足感」( $F(2,482) = 0.27, n.s.$ ),

表4 部活動, 学年別の各得点と分散分析結果

	吹奏楽部		運動部		文化部		主効果		交互作用
	第1学年	第2学年	第1学年	第2学年	第1学年	第2学年	部活動別	学年別	
満足感	5.55 (1.18)	5.33 (0.78)	5.35 (1.01)	5.31 (0.98)	5.71 (1.19)	5.68 (0.98)	1.93	0.43	0.27
活動性	5.23 (0.99)	4.51 (1.00)	5.05 (1.22)	4.81 (1.28)	5.00 (1.27)	4.17 (1.43)	1.11	10.92***	1.97
負担感	5.11 (1.18)	4.80 (0.85)	4.11 (1.18)	4.24 (1.19)	5.59 (0.91)	5.77 (1.10)	34.76***	0.00	1.31

\*\*\* $p < .001$  上段: 平均値, 下段: (SD)

「活動性」( $F(2,482)=1.97, n.s.$ ), 「負担感」( $F(2,482)=1.31, n.s.$ ) のいずれについても有意な交互作用は見られなかった。

「活動性」については、学年の主効果 ( $F(1,482)=10.92, p<.001$ ) が有意であり、「負担感」については、部活動の主効果 ( $F(2,482)=34.76, p<.001$ ) が有意であった。

主効果が有意であった「活動性」, 「負担感」についてテューキー (Tukey) のHSD法で多重比較を行った。その結果、「活動性」においては、吹奏楽と文化部の学年間の差が有意であった ( $p<.01$ )。

「負担感」においては、運動部と吹奏楽部、文化部の差は有意であった ( $p<.001$ )。また、吹奏楽部と文化部の差も有意であった ( $p<.01$ )。

## 3.2 部活動の有用感測定尺度の分析

### 3.2.1 因子分析結果

全対象488名のうち、誤回答、空白、意図的に歪めた回答を書いたと思われるもの5名を除き、483名を有効回答とした。結果の分析にあたっては、それぞれの質問に対して1点から5点の得点を与え、平均値と標準偏差を求めた。14項目に天井効果が見られたが、中学生の部活動に対する共通の感じ方や考え方であり、また数値の偏りも大きくないと判断されたため除外せず、すべての項目を分析に含めることとした。

31項目について最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、固有値の変化は9.89, 1.99, 1.64, 1.35, 1.33, 1.14, 1.04…となっており、スクリープロットからも判断して5因子構造もしくは4因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度5因子および4因子を仮定して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。

因子の抽出にあたっては回転後の因子負荷量が0.35以上で、かつ複数の因子にまたがって0.35以上の負荷を示さないことを基準とした。最終的には4因子が得られた。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表5に示す。なお、回転前の4因子で全分散を説明する割合は57.55%であった。

第1因子は、「人への思いやりを学ぶ」「物事に進んで取り組む態度を身につける」「礼儀や規律を身につける」「先生と生徒、生徒同士の望ましい人間関係を育てる」「自分の長所を発見し、それを伸ばす」「責任感を身につける」「学習意欲を高める」「み

表5 部活動の有用感測定尺度の因子分析結果

項目内容	I	II	III	IV
部活動は、人への思いやりを学ぶことに役立っている。	.82	.14	-.16	-.04
部活動は、物事に進んで取り組む態度を身につけることに役立っている。	.82	-.12	.15	-.09
部活動は、礼儀や規律を身につけることに役立っている。	.70	-.21	-.08	.21
部活動は、先生と生徒、生徒同士の望ましい人間関係を育てることに役立っている。	.68	.25	-.08	-.03
部活動は、自分の長所を発見し、それを伸ばすことに役立っている。	.64	.03	.24	-.18
部活動は、責任感を身につけることに役立っている。	.54	-.16	.20	.17
部活動は、学習意欲を高めることに役立っている。	.43	.18	-.20	.21
部活動中、みんなが一つになったと感じることがある。	.35	.07	-.14	.33
部活動をやっていると、時間の経つのがすごく早く感じる。	-.04	.81	-.10	.09
部活動に行くのが楽しみである。	-.05	.80	.10	.02
もっと部活動の時間が長ければいいと思う。	-.09	.70	.10	-.01
部活動は、学校生活を楽しくする。	.23	.63	.13	-.17
部活動は、先輩・後輩の関係を学ぶことができる。	.00	.46	.09	.16
もっと練習して上手になりたいと思う。	-.08	.04	.69	-.01
コンクールや試合に出場するからには良い結果を残したい。	-.05	.04	.60	-.18
部活動にやりがいを感じる。	.11	.15	.60	.11
自分の所属する部のためには何でも一生懸命頑張れる。	.13	.07	.49	.17
部活動中、集中して取り組んでいる。	-.04	.07	.02	.68
部活動中、練習をなまけることがある。(*)	.05	.00	-.13	.43
目標をもって部活動に取り組んでいる。	.02	.02	.31	.39
(*)は逆転項目				
因子間相関	I	II	III	IV
	I	-	.64	.65
	II	-	.69	.51
	III	-	-	.61
	IV	-	-	-

んなが一つになったと感じる」からなっており、部活動を通して身に付けられる諸能力を総合的にとらえたものと解釈し、部活動の「有用感」因子と命名した。

第2因子は、「時間の経つのがすごく早く感じる」「行くのが楽しみである」「もっと時間が長ければいい」「学校生活を楽しくする」などからなっており、活動の充実感や楽しさにかかわるものと解釈し、「充実感」因子と命名した。

第3因子は、「もっと練習して上手になりたいと思う」「コンクールや試合に出場するからには良い結果を残したい」「やりがいを感じる」「部のためには何でも一生懸命頑張れる」からなっており、コンクールや試合の結果を求めるなど、目標に向かっての努力や向上に関するものと解釈し、「向上心」因子と命名した。

第4因子は「部活動中、集中して取り組んでいる」「部活動中、練習をなまけることがある(逆転項目)」「目標をもって部活動に取り組んでいる」からなっ

ており、「集中力」因子と命名した。

### 3.2.2 下位尺度間の関連

四つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「有用感」得点(平均, 3.81, *SD* 0.75), 「充実感」得点(平均, 3.73, *SD* 0.96), 「向上心」得点(平均, 4.35, *SD* 0.62), 「集中力」得点(平均, 3.73, *SD* 0.72)とした。下位尺度間の相関は表6のとおりであり, 四つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

表6 下位尺度得点の相関と平均値, *SD*

	有用感	充実感	向上心	集中力	平均	<i>SD</i>
有用感	-	.60**	.61**	.50**	3.81	0.75
充実感		-	.66**	.45**	3.73	0.96
向上心			-	.51**	4.35	0.62
集中力				-	3.73	0.72

\*\* $p < .01$

内的整合性を検討するために各下位尺度の信頼性を求めたところ, Cronbachの $\alpha$ 係数は, 因子I「有用感」が $\alpha = .86$ , 因子II「充実感」が $\alpha = .85$ , 因子III「向上心」が $\alpha = .75$ と十分な信頼性が得られたが, 因子IV「集中力」は $\alpha = .56$ にとどまった。

部活動, 学年別に下位尺度の相関をみると, 吹奏楽部の第1学年, 第2学年は, ともに四つの下位尺度が互いに有意な正の相関を示した(表7, 表8)。

運動部の第1学年, 第2学年ともに四つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した(表9, 表10)。

文化部の第1学年では, 「有用感」と「充実感」「向上心」「集中力」の間に有意な正の相関が見られた。しかし, 「充実感」と「向上心」, 「充実感」と「集

表7 吹奏楽部第1学年の下位尺度間相関

	有用感	充実感	向上心	集中力	平均	<i>SD</i>
有用感	-	.75**	.61**	.64**	3.90	0.65
充実感		-	.67**	.37*	4.08	0.81
向上心			-	.49**	4.41	0.67
集中力				-	3.89	0.51

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

表8 吹奏楽部第2学年の下位尺度間相関

	有用感	充実感	向上心	集中力	平均	<i>SD</i>
有用感	-	.71**	.62**	.53**	3.63	0.63
充実感		-	.74**	.60**	3.79	0.83
向上心			-	.61**	4.32	0.54
集中力				-	3.67	0.60

\*\* $p < .01$

表9 運動部第1学年の下位尺度間相関

	有用感	充実感	向上心	集中力	平均	<i>SD</i>
有用感	-	.60**	.63**	.47**	3.89	0.80
充実感		-	.60**	.40**	3.74	0.97
向上心			-	.51**	4.42	0.56
集中力				-	3.75	0.76

\*\* $p < .01$

表10 運動部第2学年の下位尺度間相関

	有用感	充実感	向上心	集中力	平均	<i>SD</i>
有用感	-	.56**	.58**	.45**	3.81	0.73
充実感		-	.71**	.47**	3.67	1.03
向上心			-	.47**	4.31	0.66
集中力				-	3.74	0.70

\*\* $p < .01$

中力」, 「向上心」と「集中力」の間には中程度の相関は見られるものの, 有意ではなかった(表11)。

表11 文化部第1学年の下位尺度間相関

	有用感	充実感	向上心	集中力	平均	<i>SD</i>
有用感	-	.71**	.61**	.64**	3.72	0.69
充実感		-	.51	.42	3.65	0.92
向上心			-	.47	4.31	0.61
集中力				-	3.79	0.90

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

文化部の第2学年は, 四つの下位尺度が互いに有意な正の相関を示した(表12)。

表12 文化部第2学年の下位尺度間相関

	有用感	充実感	向上心	集中力	平均	<i>SD</i>
有用感	-	.78**	.70**	.68**	3.15	0.59
充実感		-	.56*	.60*	3.35	0.66
向上心			-	.75**	3.91	0.64
集中力				-	3.27	0.96

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

### 3.2.3 吹奏楽部, 運動部, 文化部の差の検討

運動部, 吹奏楽部, 文化部の差を検討するために, 部活動別と学年別の2要因の分散分析により比較した(表13)。その結果, 「有用感」については「部活動別」( $F(2,477) = 4.40, p < .01$ )と「学年」( $F(1,477) = 7.76, p < .01$ )に有意な主効果が見られたが, 「部活動 $\times$ 学年」の交互作用は有意ではなかった( $F(2,477) = 1.85, n.s.$ )。「充実感」については, 「部活動」( $F(2,477) = 2.84, n.s.$ )と「学年」( $F(1,477) = 2.42, n.s.$ )

表13 部活動、学年別の各得点と分散分析結果

	吹奏楽部		運動部		文化部		主効果		交互作用
	第1学年	第2学年	第1学年	第2学年	第1学年	第2学年	部活動別	学年別	
有用感	3.90 (0.65)	3.63 (0.63)	3.89 (0.80)	3.81 (0.73)	3.72 (0.69)	3.15 (0.59)	4.40**	7.76**	1.85
充実感	4.80 (0.81)	3.79 (0.83)	3.74 (0.97)	3.67 (1.03)	3.65 (0.92)	3.35 (0.66)	2.84	2.42	0.57
向上心	4.42 (0.67)	4.32 (0.54)	4.42 (0.56)	4.31 (0.66)	4.31 (0.61)	3.91 (0.64)	2.41	4.80*	0.81
集中力	3.89 (0.51)	3.67 (0.60)	3.75 (0.76)	3.74 (0.71)	3.79 (0.90)	3.27 (0.96)	1.32	5.63*	2.26

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  上段：平均値，下段：(SD)

は有意な主効果が見られなかった。また、「部活動×学年」の交互作用も有意ではなかった ( $F(2,477) = 0.57, n.s.$ )。

「向上心」については、「部活動」( $F(2,477) = 2.41, n.s.$ )の主効果は有意ではなかったが、「学年」( $F(1,477) = 4.80, p < .05$ )の単純主効果は有意であった。「部活動×学年」の交互作用は有意ではなかった ( $F(2,477) = 0.81, n.s.$ )。

「集中力」については、「部活動」( $F(2,477) = 1.32, n.s.$ )の主効果は有意ではなかったが、「学年」( $F(1,477) = 5.63, p < .05$ )の主効果は有意であった。「部活動×学年」の交互作用は有意ではなかった ( $F(2,477) = 2.26, n.s.$ )。

### 3.2.4 重回帰分析の結果

部活動の有用感測定尺度によって得られた下位尺度の因果関係を検討するために、「有用感」を従属変数とし、「充実感」得点、「向上心」得点、「集中力」得点を独立変数にして強制投入法による重回帰分析を行った(表14)。

全体を対象にした重回帰分析の結果、重決定係数は.48であり、0.1%水準で有意な値であった。また、「充実感」「向上心」「集中力」から「有用感」に対する標準偏回帰係数も0.1%水準で有意であった。

表14 全体、学年別の重回帰分析の結果

	全体	第1学年	第2学年
	$\beta$	$\beta$	$\beta$
充実感	.31***	.45 <i>n.s.</i>	.53*
向上心	.31***	.22 <i>n.s.</i>	.32 <i>n.s.</i>
集中力	.20***	.34 <i>n.s.</i>	.12 <i>n.s.</i>
R <sup>2</sup>	.48***	.67**	.72**

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

$\beta$ ：標準偏回帰係数

学年別では第1学年の重決定係数が.67であり、1%水準で有意であったが、各独立変数から有用感に対する標準偏回帰係数は有意ではなかった。

第2学年では、重決定係数が.72であり、1%水準で有意であった。また、「充実感」から「有用感」に対する標準偏回帰係数が5%水準で有意であった。

表15 運動部の学年別の重回帰分析の結果

	第1学年	第2学年
	$\beta$	$\beta$
充実感	.32***	.25**
向上心	.35***	.32***
集中力	.16**	.19**
R <sup>2</sup>	.50***	.41***

\*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

運動部の学年別の重回帰分析では、第1学年は重決定係数が.50であり、0.1%水準で有意であった。「充実感」「向上心」「集中力」のいずれの独立変数も「有用感」に対する標準偏回帰係数は有意であった。第2学年は重決定係数が.41であり、0.1%水準で有意であった。「充実感」「向上心」「集中力」のいずれの独立変数も「有用感」に対する標準偏回帰係数は有意であった(表15)。

吹奏楽の学年別の重回帰分析では、第1学年は重決定係数が.71であり、0.1%水準で有意であった。「充実感」「集中力」から「有用感」に対する標準偏回帰係数は有意であったが、「向上心」から「有用感」に対する影響はほとんど見られなかった。

第2学年は重決定係数が.54であり、1%水準で有意であった。「充実感」から「有用感」に対する標

表16 吹奏楽部の学年別の重回帰分析の結果

	第1学年	第2学年
	$\beta$	$\beta$
充実感	.58***	.52**
向上心	.02 <i>n.s.</i>	.16 <i>n.s.</i>
集中力	.41***	.12 <i>n.s.</i>
R <sup>2</sup>	.71***	.54**

\*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$  $\beta$  : 標準偏回帰係数

標準偏回帰係数は有意であったが、「向上心」と「集中力」から「有用感」に対する標準偏回帰係数は有意ではなかった(表16)。

表17 文化部の学年別の重回帰分析の結果

	第1学年	第2学年
	$\beta$	$\beta$
充実感	.45 <i>n.s.</i>	.53**
向上心	.22 <i>n.s.</i>	.32 <i>n.s.</i>
集中力	.34 <i>n.s.</i>	.12 <i>n.s.</i>
R <sup>2</sup>	.67*	.72**

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$  $\beta$  : 標準偏回帰係数

文化部の学年別の重回帰分析では、第1学年は重決定係数が.67であり、5%水準で有意であったが、「充実感」「向上心」「集中力」から「有用感」に対する標準偏回帰係数は有意ではなかった。

第2学年は重決定係数が.72であり、1%水準で有意であった。「充実感」から「有用感」に対する標準偏回帰係数は有意であったが、「向上心」と「集中力」から「有用感」に対する標準偏回帰係数は有意ではなかった(表17)。

## 4 考察

### 4.1 中学校吹奏楽部員の「満足感」に関連する要因

本研究は、部活動に所属する中学生を対象とした質問紙調査により、部活動のイメージや見方、考え方を測定し、吹奏楽部と運動部、他の文化部所属の生徒と探索的に比較することを通して、学校吹奏楽の指導改善のための示唆を得ることを目指した。

SD法による部活動のイメージ測定尺度では、因子分析の結果、「満足感」「活動性」「負担感」の3因子が見出された。下位尺度の検討からは、「満足感」と「活動性」、「満足感」と「負担感」は互いに有意な正の相関を示した。特に「満足感」と「活

動性」の相関が高く、所属する部員の取り組み姿勢や活動内容、部活動の雰囲気「満足感」に関連していることが分かる。

すなわち、生徒が所属する部活動に対して「楽しい」「いごちのよい」と感じている場合、その活動が活発になり、逆に所属する部活動に対して「つまらない」「いごちの悪い」と感じている場合、その活動も「だらけた」「ふまじめな」ものになってしまう。「活動性」と「負担感」がほぼ無相関であることも合わせて考えれば、中学生の部活動指導においては、「活動性」を高めるための指導の充実は、「負担感」に影響されることなく「満足感」へとつながっていくものと考えられる。

また、この結果の背景には顧問の指導姿勢や指導内容の影響も考えられる。学校現場においては、各部活動の顧問を決定するにあたって、教員の教科や専門性、部活動経験等がある程度は勘案するが、学校の諸事情により知識や経験がないままに顧問となる場合もあり得る。そのような場合、顧問の指導姿勢は消極的になりがちであり、「活動性」と生徒の「満足感」へ影響を与えるものと考えられる。このことは、「先生がいるのだからしっかり教えてもらいたい」「いくら時間を増やしてもやる気がないなら良い結果も残せない」などの自由記述の内容からも推察される。

本研究では質問紙作成の過程で、調査協力校との協議により、顧問の評価となり得るような質問項目は削除した。それらの質問項目を用いることで、より詳細な分析が可能であったと考えられる。その点については、研究上の大きな問題点である。

吹奏楽部、運動部、文化部の分散分析の結果からは、どの下位尺度についても有意な交互作用は見られなかった。

「満足感」については、部活動別の三つの群および学年間に有意差は見られず、中学生の部活動の「満足感」に関連する要因は、ほぼ共通のものといえる。

「活動性」については部活動別の有意差は見られなかったが、運動部と文化部の差は有意傾向にあった。運動部は練習や試合が活発に行われていること、日頃から厳しい練習を重ねていることから、文化部との活動内容の違いによる部の雰囲気等の違いが表れたものと考えられる。

学年別の差に有意な主効果が見られたが、これは吹奏楽部と文化部の学年間の差による結果である。



文化部と吹奏楽部の第2学年は、部員の取り組み姿勢や雰囲気、活動内容等について厳しい評価をする傾向にあった。それが文化部系の部活動の特質によるものなのか、あるいは女子部員が多いことによる性差の影響なのか、あるいは運動部における監督、文化部における顧問のような指導者の位置づけや指導スタイルの違いに起因するものなのかは、この研究結果からは推定できない。今後の検討課題の一つである。

「負担感」については、部活動別の主効果は有意であったが、学年の差は見られなかった。運動部の下位尺度得点の平均値は4.17、吹奏楽は4.95、文化部は5.69となっており、一般的に考えられる活動の度合いや練習量が直接的に表れており、文化部に比べ運動部や吹奏楽部が「負担感」を感じているといえる。

また、「満足感」「活動性」「負担感」のいずれの因子についても第2学年の下位尺度得点は低い結果となったが、これは調査時には第1学年が中学校入学後7ヶ月足らずしか経っておらず、学校生活や部活動等への適応が不十分であるのに対し、第2学年は学校や部活動への適応が進んでいること、また第3学年からリーダーとしての役割を引き継ぎ、活動内容や顧問の指導等について自分なりの考えをもつようになることなどの影響が考えられる。

#### 4.2 中学校吹奏楽部員の「有用感」に影響する要因

部活動の有用感測定尺度では因子分析の結果、「有用感」「充実感」「向上心」「集中力」の4因子が見出された。下位尺度の検討からは、四つの因子は互いに有意な正の相関関係にあり、相関係数の差も大きなものではなかった。したがって、中学生が部活動を通して「思いやりの心」「積極性」「礼儀や規律」「望ましい人間関係」「責任感」「学習意欲」などの有用感を感じるためには、「充実感」「向上心」「集中力」が総合的に作用するものといえる。

部活動別では、相関に差異が見られた。三つの部活動に共通することは、「有用感」と「充実感」、「有用感」と「向上心」の正の相関が高いことであり、試合やコンクールが関わる吹奏楽部と運動部は「充実感」と「向上心」の正の相関も高かった。また吹奏楽部と文化部は、「集中力」と「有用感」の相関が運動部に比べ高かったが、その関連要因については重回帰分析の考察で合わせて述べる。

分散分析の結果からは、「有用感」において、部

活動と学年に有意な主効果がみられた。運動部の「有用感」尺度得点の平均値は3.85であり、吹奏楽部の「有用感」尺度得点の平均値は3.76と大きな差は見られなかったが、文化部の「有用感」尺度得点の平均値は3.41であった。学年別に見てみると、運動部の第1学年3.89、第2学年3.81、吹奏楽部の第1学年3.90、第2学年3.63、文化部の第1学年3.72、第2学年3.14となっており、運動部では学年間の差は少ないが、吹奏楽部と文化部は第1学年の方が「有用感」を強く感じていることが分かる。

この結果からは、文化部および吹奏楽部の第2学年が、SD法によるイメージの測定結果と同様に、所属する部活動の活動内容等について自分なりの考えをもつようになってきているなどの影響が考えられる。また文化部は、運動部や吹奏楽部に比べて試合やコンクールなどの団体としての活動の機会が少ないことも要因の一つといえるのではないかと。このことは、質問項目3「部活動中みんなが一つになったと感じることがある」の平均値が、運動部で3.63、吹奏楽3.77となっているのに対し文化部は3.10と低い数値となっていることから推察される。活動内容や活動形態等の部活動の特徴に起因する結果ではあるが、指導の改善の一つの視点になると考える。

「充実感」については、部活動別、学年の主効果も見られず、交互作用も有意ではなかった。しかし、「充実感」尺度得点の平均値は、運動部3.70、吹奏楽部3.92、文化部3.48となっており、吹奏楽部が総じて部活動の「充実感」を感じていることがわかる。

「充実感」下位尺度は、「部活動をやっていると時間が経つのが早く感じる」など、練習内容と時間のかかわり、また、練習成果なども関連する尺度である。吹奏楽部は大人数で活動し、一つの演奏を作り上げる。また、毎日の積み重ねが演奏力の向上として実感されたり、コンクールや演奏会で対外的な評価を受ける機会も多く、「充実感」が他の部活動に比べ認識されやすい活動といえよう。

「向上心」については、「有用感」と同様に学年間の有意な差が見られた。「向上心」尺度得点の平均値は、運動部の第1学年4.41、第2学年4.31、吹奏楽部の第1学年4.41、第2学年4.32、文化部の第1学年4.30、第2学年3.90となっており、文化部の第2学年の低い数値がもたらした結果である。

「集中力」についても学年の主効果が有意であった。「集中力」尺度得点の平均値は、運動部の

第1学年3.75, 第2学年3.74, 吹奏楽部の第1学年3.89, 第2学年3.67, 文化部の第1学年3.79, 第2学年3.27となっており、「向上心」と同様の結果となった。

重回帰分析の結果では、「充実感」「向上心」「集中力」から「有用感」に対する標準偏回帰係数は有意であり、中学生の部活動における「有用感」については「充実感」と「向上心」、次に「集中力」が影響を及ぼすことが明らかとなった。特に「充実感」が与える影響は第1学年、2学年ともに大きく、部活動指導にあたっては、活動内容に伴う十分な時間の確保、活動の楽しさ、成果の実感についての配慮が必要といえる。

部活動、学年別に見てみると、運動部では第1学年、第2学年ともに「充実感」「向上心」「集中力」の高まりが「有用感」の高まりにつながることで、特に「充実感」と「向上心」が大きく影響することが明らかとなった。他方、吹奏楽部は第1学年、第2学年ともに「充実感」が「有用感」に対して最も影響が大きく、第1学年は目標や活動中の「集中力」が「有用感」に与える影響が大きいことが明らかとなった。

文化部は第2学年の「充実感」の標準偏回帰係数のみが有意であり、「充実感」の高まりが「有用感」に影響を及ぼしている。このことは吹奏楽部と同様に活動の「充実感」への配慮が部活動の「有用感」、すなわち部活動を通して身に付けるべき諸能力の獲得へとつながっていくものと考えられる。

## 5 まとめ

以上の考察から得られた知見を下記に記す。

第1は、中学生の部活動「満足感」に関連する要因は共通であり、「活動性」の高まりが「負担感」に影響することなく「満足感」を高めること。

第2は、中学生の部活動「有用感」は「充実感」「向上心」「集中力」のバランスのとれた指導によって高まること。

第3は、吹奏楽部所属の生徒は「有用感」「充実感」「向上心」「集中力」のいずれについても他の部活動に比較して高く感じているが、第2学年の生徒は活動内容や顧問の指導について自分なりの考えや物の見方をする傾向が強いため、指導にあたっては一定の配慮が必要となること。

第4は、吹奏楽部所属の生徒の「有用感」は「充

実感」が大きく影響していること。

吉富・谷原(1998)<sup>11</sup>は、学校吹奏楽活動の主な有用感として「学校生活の充実」を挙げている。すなわち、部活動に参加することで、学校生活そのものが楽しく充実したものになることこそが部活動の有用感なのである。本研究で得られた「有用感」尺度に含まれる項目は、「人への思いやりを学ぶこと」「物事に進んで取り組む態度を身に付ける」「礼儀や規律を身に付けること」「先生と生徒同士の望ましい人間関係を身に付けること」「自分の長所を発見し、それを伸ばすこと」「責任感を身に付けること」「学習意欲を高めること」「みんなが一つになったと感じる」であり、これらは学校教育において全てが欠くべからざる内容である。これらが身に付くような吹奏楽指導、部活動指導が大切であり、それらが身に付くための指導の工夫改善が、生徒に「充実感」を味わわせ、「集中力」や「向上心」の高まりとともに充実した学校生活へとつながっていくであろう。

## 6 今後の課題

本研究で用いた質問紙は、作成の過程で調査協力校との協議により、顧問の評価となり得るような質問項目は削除した。それらの質問項目を用いることで、より詳細な分析が可能であったと考えられる。その点については、研究上の大きな問題点である。また、文化部の人数が少なく、一般化するためには調査方法の更なる検討と工夫が必要であり、高等学校との比較や広い範囲での検討も必要であろう。

今後は継続的な研究を積み重ねていくことにより、学校吹奏楽および部活動の指導改善についての体系的な研究を行っていきたい。

### [謝辞]

本研究を進めるにあたり、調査に協力いただいた各校の顧問、生徒のみなさんに心からの感謝を申し上げます。また、質問紙の検討にあたってご指導を賜りました協力校の所属長のみなさまにも心からの感謝を申し上げます。

### [注と文献]

<sup>1</sup> 本研究は、羽澤の2008年度秋田大学教育文化学部卒業論文『学校教育における吹奏楽活動の教育的

効果－部活動に所属する中学生への質問紙調査の結果から－』で得られたデータを再分析したものである。

- <sup>2</sup> これらは特別活動（学級活動、生徒会活動、学校行事）によって培われる資質・能力であり、特別活動の目標の柱として設定されているものである。文部科学省「新しい学習指導要領－『生きる力』」〈[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/toku.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/toku.htm)〉2009年2月8日。
- <sup>3</sup> 文部科学省、同上。
- <sup>4</sup> 角谷詩織「部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか」『発達心理学研究』第16巻1号、日本発達心理学会、2005、pp.26-35。
- <sup>5</sup> 青木邦男「高校運動部員の社会的スキルとそれに関連する要因」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』第5号、2005、pp.25-34。
- <sup>6</sup> 吉村斉「学校適応における部活動とその人間関係のあり方－自己表現・主張の重要性－」『教育心理学研究』45、日本教育心理学会、1997、pp.337-345。
- <sup>7</sup> 全日本吹奏楽連盟「登録加盟団体数」〈<http://www.ajba.or.jp/kameidantai2007.pdf>〉2008年1月15日。
- <sup>8</sup> 吉富功修・岩崎英子「スクールバンドの指導者に関する研究(1)」『研究紀要』第5号、日本管打吹奏学会、1995、pp.82-99。
- <sup>9</sup> 吉富功修・谷原葉子「スクールバンドの指導者に関する研究(2)」『広島大学教育学部教科教育学科音楽教育学教室論集X』、1998、pp.11-34。
- <sup>10</sup> 安達弘潮「音楽教育から見た吹奏楽活動－その実態と諸問題について」『音楽教育学6』日本音楽教育学会、1976、pp.4-13。
- <sup>11</sup> 吉富・谷原、前掲。

## Summary

The purpose of this paper is to investigate by means of a questionnaire the image and feelings that junior high school brass band club students have about their club activities. By comparing the results gained from students belonging to brass band clubs, athletic clubs and other culture clubs, it was expected to find that the results would help improve our instructions for them in school settings. A questionnaire was sent to a total of 488 students, including 264 male and 224 female students in the first year and the second year in junior high schools in Akita City who belong to brass band clubs, athletic clubs and other culture clubs. A factor analysis was administered on the responses to each of the two sets of questionnaire items. For the first group of items (their image about club activities), three factors were extracted: namely, 'Contentment', 'Activeness', and 'Burden'. For the second group of items (their feelings about club activities), four factors were extracted: 'Effectiveness', 'Satisfaction', 'Progress' and 'Concentration'. The results of the analysis based on these factors revealed that the factors affecting the feelings of satisfaction with extra-curricular activities among junior high students are the same: 1) The effectiveness of extra-curricular activities among junior high students increase by a well-balanced teaching aimed for satisfaction and progress and concentration; and 2) as for the students in brass band clubs, a sense of satisfaction has a big effect on their effectiveness.

**Key Words** : Brass Band Club, Junior High School Students, Extra-Curricular Activities, Factor analysis, Multiple Regression Analysis

(Received February 12, 2009)